
ポケモンの世界にお気に入りのポケモン持って行こう！

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンの世界にお気に入りのポケモン持って行こう！

【Nコード】

N9037V

【作者名】

アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】

俺はポケモンが大好きで、ポケモン世界大会の日本代表戦の帰り道俺は1000年の周期で起こる空間の裂け目に吸い込まれちゃった俺はそこで神に会い特典をもらってポケモンの世界に行くことになった

ポケモンの世界へ

単刀直入に言います俺はポケモンの世界にいます

俺の世界ではゲームやアニメになっっているポケモン

俺は小さいときからずっとポケモンをやっている

お気に入りのポケモンは ピカチュウ ミロカロス ジュカイン

ロコン グレイシアだ

特にミロカロスは思い入れが強い、長い時間をかけてヒンバスを釣り上げ

質のいいポフィンを頑張って作って与えてミロカロスに進化させたのだ

進化したときは感動したな

おっともちろん他のポケモンも大好きだ

俺はポケモンの世界大会の日本代表戦で勝利して日本代表に選ばれた
そしてウキウキ気分で家に帰ろうとするといきなり空間が裂けたのだ
その時は思わず

「パルキア!？」

っと言ってしまった

そして俺はその裂け目に吸い込まれてしまった

そして俺はそこで神様に会った

どうやら1000年周期で時空の裂け目が発生してしまうのだが
今回俺はそれに吸い込まれてしまったというわけだ
とりあえず戻してくれといったら

俺は元の世界では行方不明でなぜか死亡しているという事になって
おり

そんな時に戻ったら大混乱が起きるといわれたので俺はポケモンの
世界に行くことになった

行き先はイツシュ地方のライモンシティ

どうやら6歳のトレーナーズスクールから始めるらしい

お詫びとして俺は身体能力MAX

俺の捕まえた及び持っているポケモンはミュウツー以上のステータス
俺のお気に入りポケモンを連れて行く

ポケモンと話せて心を通じ合わせることができる

おまけで6歳以前の記憶がある

ポケモンを癒す力

という特典を貰ってポケモンの世界に来た

俺は部屋の中で目覚めた

俺はとりあえず鏡を見るとに硬直した

だって俺・・・ガンムSE Dのキ ッヤ トになってるだもん！

まあ好きなキャラだしまあいつか

因みに俺の名前は杉山 綺羅だ

そうするとモンスターボールからピカチュウが勝手に出てきた

「うわぁ！」

「ふう〜やっぱり外のほうが気持ちいいね！」

「（マ、マジでポケモンの言葉が分かる・・・）な、なんで勝手に出てきたんだ？」

「あ〜！キラ！やったついにキラと話ができた！」

ピカチュウは俺の肩に飛び乗り頬にすりすりしてくる

ああ・・・癒される・・・

「なあお前俺のゲームの中にいたピカだよな？」

「うん！そうだよ！僕達キラにずっと大事にされててキラとお話
したかったんだよ！」

「え！？じゃあるルやカインやイファやフリーもか！？」（お気に入り
のポケモンの順番で言っています）

「うん！特にイファとフリーはずつつつと話ができたらなあ〜つて言ってたよ」

「そっか〜じゃあ出て来い！イファ！フリー！」

俺はモンスターボールを二つ投げてイファとフリーを出した

「イ、イファ？フリー？」

「キ、キラアアア！！！！」

二人？は俺に飛びついてきた

俺は優しく抱きこむ

「キラア〜ずつとお話が出たかったよ〜会いたかったよ〜」

「キラア〜」

二人は俺の胸に顔を擦り付けながら甘えてくる

「あはは二人とも相変わらずキラがだい好きだね」

「当たり前でしょ！ピカ！」

「キラ以上にポケモン思いで優しい人なんて居ないわ！」

なんか照れるな／／

「つていうかピカ！なんでキラの肩に乗ってるのよ！！？」

「僕もキラに会えたのが嬉しくて」

「その気持ちは分かるけど私も乗りたい！！」

「！！！！メツチャハモツた！？」

そういう俺とピカも完璧にハモツた

その後ピカを頭に乗せイファとフリーを肩に乗せた
そして母さんに早くしないと遅刻するわよと言われて
皆を何とか説得しボール戻し朝ごはんを食べた
そして・・・

ピンポーン

インターホンがなった

「ほらキラお迎えが着たわよ」

「はあ、来なくていいって言ってるのに」

俺は渋々鞆を持って家を出た

「おはようキラ」

「おはようでもさ毎朝来なくていいって言ってるじゃん」

ドアの前に居たのは艶がある黄色い髪と肌

そしてここはライモンシティ・・・

分かるよね？

「さあ行くよキラ」

「ああ分かったよ、カミツレ」

ゲームではジムリーダーをやってるカミツレさんです

俺とカミツレは幼馴染という関係です

俺はカミツレと並びながらトレーナーズスクールに向かう

初ポケモンバトル

俺はカミツレと一緒にトレーナーズスクールに向かっている

未来のシャイニングビューティーが幼馴染って

カミツレファンが聞いたらボコられそうだな

俺が6歳からやり直す事になるとはな・・・

そんな事を考えているとトレーナーズスクールに到着した

「ねえキラ今日はバトルの実習だけど何を出すの？」

「うーん・・・イファかフリーで行こうと思うけどカミツレはどうするの？」

「私はシママで行くつもりよ」

「相変わらずの電気だな」

「いいじゃないお互い頑張りましょう」

俺とカミツレはお互いに微笑んで教室に入った

そして先生が来てHRが終わり皆外に出て実習が始まった

おっ俺の前にカミツレか

「カミツレ頑張れよ」

「ええ応援してよ」

「もちろん」

俺は笑顔で返した

「シママ！」

カミツレはシママを繰り出した

将来的にはカミツレの手持ちの中で一番レベルの高いゼブライカと

なるシママだ

一方相手が繰り出したのはシキジカだ
相性的にはシママに分が悪い

草タイプに電気タイプの技はいまひとつだ

「シママ！でんこうせっか！」

まずシママがお得意のでんこうせっかでシキジカにたいあたりをした
シキジカはよろけながら負けじと体当たりを仕掛ける

シママはそれをまともに食らってしまい後ずさりをしてしまう

「シママ！！でんきショックー！！」

「シイマア〜！！」

シママは電気を起こし電気ショックを放ちシキジカに命中する

「やった！」

「いやまだだ！油断するなカミツレ！」

「え？」

カミツレは俺の言葉に驚きシキジカのほうを見る
するとシキジカはぴんぴんしていた

「え！？なんで!?!」

「シキジカは草タイプも持っている、電気技はいまひとつだ！」

「そんな・・・」

カミツレが落胆しているとシキジカが勢いを付けて向かってくる
するとシママがシキジカに向かって走り出した

「シママ!? だめよ! 真正面から!」

するとだんだんシママのスピードが上がり炎を纏った

「え!?!」

「シママ、ニトロチャージが使えるようになったのか!?!」

シママはそのままシキジカにたいあたりをしてシキジカを跳ね飛ばした

「カミツレ! たたみかれる!」

「!?! そうだね! シママ! とどめのニトロチャージ!」

「シィ〜マア〜!」

シママはぐんぐん加速しシキジカにぶつかりシキジカを戦闘不能とした

「シキジカ! 戦闘不能! シママの勝利! よって勝者カミツレちゃん!」

先生がジャッジをしカミツレは勝利した

「やった! シママありがとう!」

カミツレはシママの頭をなでてボールに戻した

「あの・・・キラありがとノノノ」

「ん? なんで俺に礼を言うんだ?」

「だ、だってキラが私に油断するとかたたみかけろって言ってくれたおかげで勝てたんだもんノノノ」

「俺は何もしてないよ、カミツレとシママが頑張ったからさ」
「あ、ありがとう／＼／＼キ、キラも頑張つてよ？」
「分かつてるよ」

俺はバトルフィールドに立った

「お前！カミツレさんとイチヤイチャしゃがって！！！」
「はあ？」

因みにカミツレはトレーナーズスクールのアイドル的な存在だ
この男子はおそらくカミツレに惚れているのだろう

「俺はただ話をしただけだぜ？」

「黙れ！お前を倒してカミツレさんと！！！」

「はいはい早く始めてください」

先生が仲介してようやく始まった

「行くぞ！イファ！」

「いけえ！ダンゴロ！」

俺はロコンのイファ、相手はダンゴロ

「！？見たことのないポケモンだ」

「イファ頼むよ」

「キラの頼みだもん 私ガンバっちゃう」

「バトル開始！」

「ダンゴロ！！いわおとし！」

ダンゴロはいわおとしを放ってくる

「イファ！ひのこ！」

「うん！」

イファはひのこを放ちいわを跳ね返す

「なにい！！？」

「にほんばれ！」

「はあくい」

イファは笑いながらバトルフィールドの上に擬似太陽を発生させた

「なななな！！！」

「イファ！フィニッシュだ！かえんほうしゃ！」

「うん！はあく！！！」

にほんばれによってかえんほうしゃは威力が倍増しているになっている

イファは放ったかえんほうしゃは地面を抉りながらダンゴゴロに直撃しフィールドから吹き飛ばした

「ダ、ダンゴゴロ！！！」

「・・・ガクツ・・・」

「ダダダ、ダンゴゴロ戦闘不能！ロコンの勝ち！勝者！キラ君！」

先生はイファのかえんほうしゃの威力にビビりながらジャッジをした

「やった〜！キラア〜」

イファは俺に飛びついてきた

俺はそれを抱きしめた

「キイリア〜」

「はははよくやったな イファ」

俺はイファを抱きしめながら頭を撫でる
イファは気持ちよさそうに身体を焦らす

「あ〜 気持ちいい 最高お〜 キリア〜もつとお〜」
「はいはい」

俺は更にイファの頭を撫で回す

「相変わらず凄いわねキラ 貴方のイファ」

カミツレが話しかけてきた

「まああんなのイファにかかったら朝食前さ」

「ほんとさすがねしかもイファの貴方への甘えっぷりそれほど懐いているという証拠、本当に素敵ね貴方って／＼／＼」

「カミツレだってシママに懐かれてるじゃん、カミツレだって素敵だぜ？」

「え！？そ、そうかしら／＼／＼／＼」

カミツレは顔を赤くする

「むっ！ねえ〜キラア〜私は〜？」

「ああイファもとても素敵だよ」

「えへへ／＼／＼」

「こうして俺のこの世界での初バトルは終わった」

「所でカミツレお前スクール卒業したらどうする？」

「うーん・・・私はジムリーダーを目指すわ」

「あれ？でもモデルになるって言ってなかったけ？」

「モデルをやりつつジムリーダーをやれば問題ないでしょ？」

「そんな事できるのか？」

「目標は大きくよ」

「まあそうだな」

「キラはどうするの？一緒にジムリーダーを目指す？／／／」

「それも悪くないけど考え中だ」

「そう・・・」

その時、カミツレの顔には影ができていた

いざ行かん！新たな世界へ！

俺達はずいにスクールを卒業した

ほとんどの奴は目指せポケモンマスター！目指せトップコーディーナーター！

という目標を掲げて旅立っていった

カミツレはジムリーダーになるために勉強をしバトルの腕を磨きモデルになるために自分も磨いている

俺はバトルの技術を磨くためカントー地方から様々な地方を旅しようと思っっている

「じゃあ行くよ俺」

俺は知り合いと家族に挨拶を済ませ最後にカミツレと別れを交わしている

「戻ってくるんだよね？」

「ああ」

「じゃあ約束して今度戻ってきたときにはバトルしてよ？それでバトルの後に言いたい事がある・・・」

「分かったよカミツレも待っててくれよ？」

「うん！」

俺はカミツレと握手をしてライモンシティを後にした

「これからどうするんですか？」

ボールからフリーリが出てきて俺に右肩に乗りながら聞いてきた

「カントー地方に行ってそれからジヨウト、ハウエン、シンオウに行こうと思ってるよ」

フリーの頭を撫でながら答えた

「あん・・・むう／＼／＼教えてくれて有難う御座います／＼／＼／」

頭を撫でているとイファが出てきて俺の左肩に乗ってきた

「キラア〜フリーばつかずるいよ〜私も〜」

「はいはい」

俺はイファとフリーを抱きかかえ二匹の頭を順番に撫でながら歩き始めた

「これでいいか？」

「う、うん／＼／＼／」

「あ、有難う御座います／＼／＼／」

俺は近くの海に出てミロカロスのルルを出した

「あ！キラ！」

ルルは俺の姿を見た途端に俺に擦り寄り顔を舐めてきた

「く、くすぐったいって」

「だってキラに会えて嬉しいんだもん」

「ちよつとルル！」

「幾らなんでも舐めすぎですー！」

「いいじゃない」

「「良くない!!」(ありません!!)」

なんだかだんだん騒がしくなってきた所でジユカインのカインとピカが出てきた

「お前達キラに会えて嬉しいのは解るが、いい加減にしろ」

「そつだよ」

「「「だつて」・・・」

「「だつてじゃない!!」

「「「ビクッ!!」」

ピカとカインが大声を出すと三人は驚いたように身体を震わせた

「幾ら嬉しくてそれだけやればキラの迷惑になる!」

「そつだよ!自分の気持ちだけではなくキラの事も考えて!」

「「・・・」

「「わかった?」

「「「はい反省してます・・・キラ・・・ごめんなさい・・・」

」

三人は声を合わせて謝ってきた

「解ってくればいいよ さあ!新たな冒険のたびに出発しよう!」

「「「「お〜!!」」」」

俺はカインとイファ、フリーをボールに戻してピカを肩に乗せルに乗った

「さあ!カントー地方に向かって出発だ!」

「は〜い」

ルルはカントー地方に向けて泳ぎだした
さあアニメが始まるまで7年

それまでバトルの腕を上げなきゃ！

ルルは綺麗な声を上げながら海を進んだ

出会い

俺が旅に出てから8年半・・・

俺は18歳となった

俺はカントー、ジョウト、ホウエン地方を旅をした

俺はかなりのんびりしながら旅をしている

今はシンオウ地方を旅している

旅している間の俺がとんでもない規格外と言う事がわかった

なぜかカントー、ジョウト、ホウエン地方の伝説のポケモンおよび

幻のポケモンと仲間になったからだ

いや〜あれは驚いた〜（詳しい事は近いうちに外伝を書きます）

後俺はホウエンではコンテストにも出場し図らずもグランドフェス

ティバルで優勝しトップコーデイネーターになった

別になりたかつたわけではないが・・・

俺は三つの地方のジムバッチを全て所有しており三つのポケモンリ

ーグで優勝を収めている

だから俺は必要以上に有名になってしまったのだ

稀にメールや電話のやり取りをしているカミツレは喜んでいるらし

いが・・・

俺は今DPで言う所の5話のユキノさんの家の近くの川で休んでいる

「まて〜！！！！」

ん？

あれはサトシとポツチャマがカプセルを追いかけて泳いでる・・・

おっし！いつちよアニメに介入しますか！

「ルル！」

俺はルルを出した

「はい！」

「ルル、あの男の子とポツチャマが追いかけてるカプセルに入ってるピカチュウとナエトルを助けるんだ」

「まっかせといて！」

ルルはカプセル目掛けて凄いスピードで泳いでカプセルをつないでいるワイヤーをアイアンテールで切り

カプセルをサトシが持ちサトシとポツチャマを背に乗せて此方に泳いできた

「よくやったぞルル、大丈夫かい？」

「あ、ありがとうございます」

「ポチャ」

「サトシ！！！」

タケシとヒカリがやって来た

「大丈夫か！？」

「ああ！この人のミロカロスのおかげさ」

「おっとお礼は後だ」

コイキング型の潜水艦が浮上してきた

「ちょっとあんた！何してくれんのよ！」

「そっだそっだ！」

「ニャー達の邪魔をするじゃないニャー！！！」

「やれやれ泥棒が何を言う」

「「「泥棒じゃない！！（ニヤい！！）ロケット団だ！！！！」」」

「泥棒には変わらない、ルル、れいとうビーム！」
「泥棒は凍っちゃえ〜!!」

ルルの放ったれいとうビームは見事に命中し氷付けにした

「今だ！ピカチュウ！10まんボルト!!」

「ピ〜カ〜チュ〜ウ!!」

サトシのピカチュウは10まんボルトを放ち潜水艦に直撃させ潜水艦は爆発した

「もう〜！何で今日は3回も吹っ飛ばされなきゃなんないのよ〜！？」

「ニヤンも悪い事してニヤいのに・・・」

「してるだろ〜!?それに二度ある事は三度あるって言うし!!」

「ソ〜〜ナンス!!」

キラ〜ン

文字どおりいや見たとおりに星になった

「やったぜ!!」

「ピッカチュウ!!」

「なかなか強いね君のピカチュウ」

「有難う御座います！さっきは助けて貰ってありがとうございます」

「いや気にしないでいいよ困ったときはお互い様さ」

「俺！マサラタウンのサトシです!!」

「俺はタケシです」

「私はヒカリです」

「俺はキラ、ポケモントレーナー兼コーディネーターだ」

「キ、キラさん!!??」

ヒカリとタケシが大声を上げる

「どうしたんだよタケシ、ヒカリ大声出して？」

「サトシ！知らないのか！？キラさんと言えば、カントー、ジョウト、ホウエン地方のポケモンリーグで

優勝するほどの実力者なんだぞ！！？」

「それだけじゃないわ！キラさんはまるで彗星のように現れて一気にトップコーデイネーターに輝いた人なのよ！！！」

「え！？そうなんですか！？」

「たはは・・・自分で言うのもなんだけどね」

「すっげえ〜」

「今は旅をしてるんだ」

「なら俺達も一緒に行ってもいいですか？」

「別に俺はいい構わないよ、旅は大勢のほうが楽しいからね」

「有難う御座います！」

「あのすみません！」

「ん？なんだいタケシくん？」

「さっきのミロカロス見せて貰いたいんですけど・・・」

「あ！私も！」

「ああいいよおいでルル」

俺は再びルルを出す

「は〜い キラア〜」

ルルは俺に擦り寄ってくる

「こらルル」

「わあ〜！綺麗〜！！」

ヒカリはポケモン図鑑を開く

『ミロカロス　いつくしみポケモン
ひとびとが　あらそいを　はじめると
みずうみの　おくそこから　あらわれて
すさんだ　こころを　いやすという
せかいいち　うつくしい　ポケモン
ミロカロスを　モデルにした　かいがや
ちようこくが　たくさん　ある』
「へえ〜世界一美しいポケモンかあ〜」
「しかもとても懐いている」

この後アニメどおりにサトシはナエトルをゲットしました

シンジ対キラ 違う者同士の戦い

俺達は今キャンプを張り昼食を堪能したばかり

「ふう〜おいしかったな〜タケシ君は料理が巧いんだな」

「いや〜それほどでも」

「よ〜しナエトル!」

「エウ?」

「俺達はこの後特訓だ!」

「エウン!」

「生温いな」

「なに!?!」

茂みからシンジが出てきた

「お前は!シンジ!」

「ふん・・・そのナエトルはお前の新しいポケモンか・・・」

「ああこいつものすごいいいやつなんだぜ!」

「今回お前には用はない」

「なに!?!」

「用があるのは貴方だ」

シンジは俺のほうを向く

「俺?」

「そう・・・カントー、ジョウト、ホウエン地方のポケモンリーグで優勝する実力者の貴方にバトルを申し込む!」

「ふう・・・まあいいか」

俺は立ち上がりシンジと向かい合う

「使用ポケモンは？」

「1体でお願いします」

「ああわかったタケシ君審判頼んだよ」

「お任せください！」

「ヒコザルバトルスタンバイ！」

シンジはヒコザルを繰り出した

「ヒコザルか・・・なら俺はカインおいで！」

「出番だ！」

ジュカインのカインを繰り出した

「ジュカインだ！」

「あれが!？」

ヒカリはすかさず図鑑を開く

『ジュカイン みつりんポケモン

うでに はえた はっぱは たいほくも

すっぱり きりたおす きれあじ

みつりんの たたかいでは むてきをほこる』

「でも草タイプじゃヒコザルと相性悪いんじゃない・・・」

「ああだけどキラさんには何か考えがあるんだと思う」

「先行は譲るよ」

「ヒコザル!かえんぐるま!」

ヒコザルは炎をまとって近づいてくる

「受け止める！」

「おうよ！」

カインは片手で糸も簡単に止める

「」「ああ！」

「なに！」

「ヒコツ！？」

「そのまま投げつける！」

「おーりゃー！」

カインは物凄い勢いで木にヒコザルを投げつけた

「ヒコオツ！」

「あなをほる！」

ヒコザルはあなをほり地面にもぐった

「カイン集中しろ、地面の揺れを感じ取るんだ」

「おう……」

カインは地面に手を当て意識を集中する

「ジユカインは何をやってるんだ？」

「地面に手を当ててヒコザルが地面をほる振動を感じ取って居場所を感じ取るうとしてるんだ」

「そんな事できるの？」

「……見つけた！」

「ソーラービーム！」
「ぐお〜りゃ〜!!！」

カインはソーラービームを放つ

「ヒコオ!!!」

ソーラービームは地面を抉りヒコザルに命中した

「な、なんてパワーだ！」

「これでも10%ほどだ、さすがにチャージ時間がかかり短すぎた」
「あれで10%!!？」

「フルチャージしたらどんな威力なんだ!？」

「でも何時チャージしたんだろう？」

「おそらく地面の揺れを探していたときにチャージを始めていたんだろう」

「ヒコザル!かえんぐるま!」

ふたたび炎を纏い向かってくる

「カイン、究極技、ハードプラント一気に決めろ!」

「おっしやあ〜!!！」

カインは背から緑の触手のような物を発射しヒコザルに命中させる

「ヒコオ・・・」

「ヒコザル戦闘不能!ジユカインの勝ち!よってこの勝負キラさんの勝ち!」

「くっ・・・」

「サンキュ戻ってくれカイン」

確かに君は強いけどポケモンは道具でも捨て駒でもないそんな考え方俺には勝てない」

「・・・それでは俺はこれで・・・」

シンジは去っていった

「それにしてもキラさんのジュカイン強いなあ〜！」

「ありがとう」

「それにしても圧倒的でしたね」

「まあねそれにしてもシンジって奴考えを変えてくれるといいんだが・・・」

トップコーディネーターだったの忘れてた

俺達はクロガネシティの途中にコトブキシティの来ている
ヒカリちゃんの初めてのコンテストだ
今ヒカリちゃんはお母さんと話している所だ

「ねえねえママ！私今誰と旅してると思う！？」

『誰ってサトシ君たちじゃないの？』

「実はね！トップコーディネーターであるキラさんと旅してるの！」

『良かったじゃない！いい目標に出会えて！』

「ええ！これからどんどん聞いていっっちゃう！」

『ほどほどにねそれとチヨークーカーは入ってなかった？』

「え？あつた様ななかったような・・・」

するとニヤルマーが尻尾にヒカリちゃんのドレスに合うチヨークー
をかけて此方にやって来た

「これじゃないかヒカリ？」

『ああ！それそれ！』

「やっぱりあんだのかい」

やって来たのは将来的にグランドフェスティバルで優勝するノゾミだ

「それにしても・・・」

俺は屈みニヤルマーに目を向ける

「・・・うん毛並みもいいし艶もある良く育てられているな」

「有難う御座います」

『有難うね』

「でも・・・どこかで見覚えがあるような・・・」

「それよりヒカリちゃんこれからは気をつけるようにね」

「はいキラさん以後気をつけます・・・」

「キ、キラ！！！！？？」

ノゾミが大声を上げる

「貴方もしかして！彗星のごとき現れ！グランドフェスティバルでは相手からの攻撃では

ポイントを削った事がなく！華麗な見せ方！技のコンボ！トップコーディネーターのキラさん！！！？」

ノゾミに何故か詰め寄られる

「近い近いつまあそんな所かな自分で言うのは何だけど」

「すごい！私キラさんに憧れてコーディネーターになったんです

！」

「それは光栄だね」

「あの・・・サイン貰っていいですか！？」

どっからかサイン用紙とペンを出す

「うんまあいいか」

俺はノゾミちゃんへと書いてサイン用紙を渡した

「有難う御座います！一生大事にします！」

「そこまで大事にしなくても・・・」

その後は大変だった

沢山のコーディネーターに囲まれサインやら握手を求められてしまった

その後はクタクタでヒカリちゃんのコンテストを見ることができなかった

クロガネジム VS ヒョウタ

俺は今ジムリーダーのヒョウタと向かい合っています
何故かって？ジム戦です！

「キラさ〜ん！がんばってください〜い！」

「キラさん！応援してま〜す！」

「自分も応援してます！」

上からサトシ君、ヒカリちゃん、タケシ君だ

「さあ使用ポケモンは2体だよ」

「わかりました」

「さあトップコーデイネーターでもありポケモンリーグ三場所連続
優勝者の実力見せてもらうよ」

「お手柔らかに」

「イワーク！」

『・・・』

「イワークか・・・なら『・・・キラ・・・』ん？」

カインを出そうとしたら違うモンスターボールから声が

『ヤラセテホシイ』

「ネメシス？」

『タタカイタイ』

「・・・よし解った」

「出すポケモンは決まったかい？」

「ええ出すのはこいつだ！」

モンスターボールを投げポケモンを出す
出てきたのはデオキシスのネメシス

「あれは！」

「デオキシス！」

「デオキシス？」

ヒカリは図鑑を開く

『デオキシス DNAポケモン』

宇宙ウイルスがレーザーを浴びて

突然変異で誕生したと言われる地球外生命体のポケモン』

「準備は良いか？ネメシス？」

『ウン』

「では試合開始！」

審判が試合開始のコールをする

「イワーク！すてみタックル！」

『・・・ああ』

「無口だな・・・」

イワークは凄まじい勢いでタックルを仕掛けてくる

「てっぺき！」

『ワカッタ』

ネメシスは頭部とやや一体化した強固な腕部を筆頭に、全体的に重

厚でごつい外見をしている

ディフェンスフォルムとなりバリアのようなものを展開し防御する

「なに!?!」

『・・・やるな』

「ナイトヘッド!」

『ウン!』

ネメシスは全体的に鋭利な外見をしており、先端の尖った触手の様な腕が特徴のアタックフォルムとなり

胸の水晶体からダークブルーの光線を出しイワークを攻撃する

『ぐおお・・・』

ドオオン!!

イワークは倒れこんだ

「イワーク!」

「イワーク! 戦闘不能! デオキシスの勝ち!」

『ヤッタ!』

「よくやったなネメシス」

俺はネメシスの頭を撫でる

『ノノキラノノハズカシイノノノノノ』

「ご苦労様イワークゆっくり休んで」

ヒヨウタはイワークを戻した

「まさか幻のポケモンを持っているなんてね」

「伝説もいますよ」

「……「え!?!」」

「なぐんてね」

「なんだ……冗談か……」

「ははは、じゃあ次はいけえ!ラムパルド!」

ヒヨウタは恐竜な様なポケモンを出す

「俺はネメシスのままで」

「そうか」

「では始め!」

「ラムパルド!しねんのずつき!」

「いつくぞお!?!」

「なんか……熱血漢っぽいな……」

「ネメシス、てっぺき」

「ウン」

もう一度ディフェンスフォームになり防御する

「さすがに硬いね」

「やるな」

「……ハナシカケナイデ」

「え?」

「ボクニハナシカケテイイノハキラトピカタチダケ」

ははは……

「さあてサイコブースト!」

「ウン」

ネメシスはいったい空中に退避しアタックフォームになり
触手の様な腕にエネルギーを収束させ虹色の球体を作り出し放つ

「ラムパルド！避ける！」

『あたぼうよ！』

ラムパルドは加速をつけ避けようとするが球体はランダムに軌道変
えながらラムパルドに向かう

『うつそおおおお！！！！！！？？？』

ラムパルドに直撃する

「ラムパルド！」

『うおおお・・・やっべえ・・・倒れそうだっぜ・・・』

・・・ガガガのマイク？

「よく耐えたな、止めのしねんのずつき！」

『エ〜イ！〜！〜』

ネメシスは一気に加速しラムパルドの頭にずつきをかます

『い・・・て・・・え・・・ガクッ』

「ラ、ラムパルド戦闘不能！デオキシスの勝ち！よって勝者！チャ
レンジャーキラ！」

「おっし！」

『・・・ウウ・・・』

キャラ紹介

転生前 杉山 綺羅 転生後 キラ

性別 男

年齢 転生前 12歳 転生後 18歳

身長 189センチ

体重 81キロ

容姿 キラ・ヤマト

引用

ポケモンの世界大会の日本代表戦で勝利して日本代表に選ばれ家に帰ろうとすると

1000年周期で発生する時空の裂け目に吸い込まれた

元の世界では行方不明でなぜか死亡しているという事になっているため

そんな時に戻ったら大混乱が起きるのでポケモンの世界に行くことになった

出身はイツシュ地方 ライモンシティ

幼馴染はカミツレ

トレーナースクール卒業後にピカ ルル カイン イファ フーリを手持ちに旅に出る

カントー、ジョウト、ホウエンでポケモンリーグ三場所連続優勝という実績を持つ

更にホウエン地方ではグランドフェスティバルにも出場し優勝しているためトップコーディネーターの顔を持つ
そのため必要以上に有名になってしまい顔もいいためファンクラブが大量にある

キラに魅せなれコーディネーターやトレーナーを目指す者も多い
なおカントー、ジョウト、ホウエンでは伝説、幻のポケモンと接触し仲間になっている

現在連れてくる幻のポケモンはデオキシスのネメシス
現在はサトシ一行と行動を共にしている

ポケモン

ピカ 『ピカチュウ』

性別

性格

うっかりや

レベル

84

ファイアレッド時代から育ててきたポケモン

6匹の中で仲裁役をしている

キラの事が大好きで肩に乗るのが好き

得意技はボルテッカー かみなり 10まんボルト アイアンテール

ルル 『ミロカロス』

レベル

82

性別

性格

すなお

ダイヤモンド時代から育てていたポケモン

とてつもなくキラに心酔し異性として好意を抱く

自分の気持ちに素直でボールから出ると直ぐにキラのもとに向かう

コジロウのサボネア、ウツボット、マスキッパと似た行動をとる

得意技はハイドロポンプ ふぶき

カイン 『ジュカイン』

レベル

91

性別

性格

れいせい

ルビー時代から育てていたポケモン

6匹の中ではリーダー的な存在

6匹の中の實力は屈指

ニガテのタイプが相手でも物ともしない

いつも甘えてばかりのイファ、フリー、ルルにはいつも檄を飛ばす
反動がある技を連続として繰り出す事ができる
得意技はハードプラント リーフブレード はかいこうせん きあ
いパンチ

イファ 『ロコン』

レベル

86

性別

性格

ひかえめ

ファイアレッド時代から育ててきたポケモン

ひかえめと言うわりになんか積極的にギャップがある

キラにいつもアピールをしている

異性としてキラに恋心を抱く

得意技にほんばれ かえんほうしゃ だいもんじ アイアンテール

フリー『グレイシア』

レベル

81

性別

性格
おっとり

ファイアレッド時代から育ててきたポケモン

当時はイーブイだったがダイヤモンドに連れて行きグレイシアに進化した

異性としてキラに好意を持っている

だがイファヤルルに比べるとやや消極的
イファとはファイアレッド時代からの恋敵ライバル

夜はキラの布団やベットに潜り込みキラの温もりを感じながら眠りに着く

得意技れいとうビーム ふぶき シャドーボール あまえる キラ
に使用

ネメシス 『デオキシス』

レベル

93

性別
?

性格
うっかりや

ホウエン地方でキラと出会いその生き方に感銘を受け行動を共にする
キラとピカ達、それとアララギ博士には心を開くがそれ以外のポケ
モン、人物だとそっぽを向く

カインにはレベルで勝っているが実力では少し劣る
現在キラが唯一手持ちに入れている幻のポケモン

得意技はサイコブースト ナイトヘッド かわらわり でんげきは
様々な技のバリエーションを持つ
あらゆるタイプのポケモンに対抗することができる

いきなりの告白!?

「キラさん！結婚を前提に私と付き合ってください!!!」

それは唐突な事だった

俺はサトシ君達と変わらぬ旅をしていた

そしてある街に立ち寄り

必要な物を買って街を出たときだ

いきなり見知らぬ女性から告白された

「……はい?」「」「」

俺たちはもちろん何が何だかぜんぜん理解できていない

「え〜と……失礼ですけど俺は貴女の事は全く持って知らない
んですけど」

「あ！私はコーディネーターのミサと言います！」

「ミサさんねでも俺なんかより良い男は沢山いるでしょう?」

「そんな事はありません！キラさんはこの世のすべての男性の頂点
に立つ人です！」

「（んなこと言われてもな）」

ボール越しに皆の声が聞こえてくる

『キラ！こんな女に構うことはないよ!』

『イファの言うとおりです!』

『キラはまだ女性とそんな関係を持つべきではありません!』

『俺としてはキラが幸せになるだったらそれでも良いと思うが』

『僕も』

皆様々だ

まあカインとピカは俺の意思を尊重してくれてるみたいだけど

「悪いけどまだ結婚とか付き合つとかそついう事はする気はないから」

「そ、そんなあ・・・だったらバトルで決めましょう！」

「バトルで？」

「私が勝つたらキラさんを私と付き合ってもらいます！」

「なんだそりゃ・・・まあいいか使用ポケモンは？」

「1対1です！」

「分かった分かった頼むよルル」

ルルを繰り出す

『キラを私のキラなんだから！』

・・・聞かなかった方がよかつたかも

「お願い！キール！」

一瞬俺も頭にはヘルカイザーが出た

出てきたのは・・・ピカチュウだ

相性で見えてきたか

『負けないからね！ミサ！頑張ろう！』

「うん！」

あれ？ポケモンと会話してる？もしかして転生者？

「では始め！」

タケシ君がスタートの合図を出す

「キール！かみなり！」

『うりゃ〜！！！！』

でかい電流がルルに向かう

「ルル、ふぶ」

『キラは渡さないんだからああ！！！！！！！！！！』

つといいながらふぶきを放ちかみなりを無効化させてピカチュウに
命中させる

『うわあ！！！！』

『まだまだあ！！！！』

ルルは追い討ちをかけるようにハイドロポンプ
れいとうビームを連続して放つ

うわあ・・・

水タイプが電気タイプをリンチだよ・・・

「ルル！」

『これでもかあ！これでもかあ！』

だめだ聞いていない

すでにピカチュウな戦闘不能

俺はルルの頭を身体を抱きしめた

『!!!???!?!?!キラ!?!?!?!?!?』

「もういいよ……ルル……」

『でも!』

「頼む……」

ルルは顔を真っ赤にした

『う、うん／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／』
「いいこだ」

ルルの頬にキスをボールに戻す

「ごめんねこんな事になって付き合うのは無理だけど友達ならいいよ」

「それでもいいです!有難う御座います!」

ミサさんは立ち去って行った

「それにしてもキラさんってモテるんですね」

「当たり前よ、トップコーディネーターでとっても顔が良いんだもんモテるに決まってるわ」

「やれやれ勘弁してくれ」

「何で俺にはモテがこないだあゝ!!!!!!!」

タケシ君が叫ぶ

するとグレッグルがどくづきを決めた

「しびれびれ……」

バタン!

ズルズル・・・

タケシ君は倒れ引きずられる

『諦めな、おめくにはモテはこないさ』

「（グレッグル容赦ね〜な）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9037v/>

ポケモンの世界にお気に入りのポケモン持って行こう！

2011年10月20日02時05分発行